

類義語の共通点の分析と記述

—その必要性と方法—

松下 達彦

【キーワード】類義語 意味分析 共通点 相違点

1. はじめに

稿者は勤務校の日本語教員養成課程の一科目「語彙研究」を担当しており、これまで毎年、授業や試験において「にぎる」と「つかむ」のような類義語の意味分析、記述を課してきた。語の意味の構成要素の抽出など、意味に対する感覚を養い、分析的に考える訓練としてよいばかりでなく、日本語学習者の質問への回答、作文や会話における語の選択の吟味といった実用面からも有用だからである。辞書記述の充実にも貢献するであろうし、さらに大きく考えれば、「現象を構造化して考える」という近代科学の方法論を学ぶこともできるであろう。

そこでは、当然のことながら類義語の意味の相違点をどう説明できるかが課題の中心であり、共通点の記述は、相違点を考えるための前提を確認する作業であると考えてきた。事実、類義語を扱う諸資料においても、共通点は意味記述の冒頭に記されることが多い（例えば、柴田ほか 1976、小学館辞典編集部 1994、国広 1997、高橋 2003 など）。また共通点を提示しない類義語辞典もある（例えば 広瀬・庄司 1994）。

ところが、学生の解答を読むうちに、共通点をうまく記述することは意外に難しいということに気づいた。共通点ではない意味を記述してしまう誤りもあるが、それ以上に多いのは、不十分な印象を与える解答である。例えば、「にぎる」と「つかむ」の共通点として「ともに動作を表す」と書いたところで、それは誤りではないが、全く不十分であろう。

類義語の記述を行なった研究は数多いが、多くは相違点の記述が中心で、共通点の記述が注目されることは少ないように思われる。そこで本稿では類義語の意味・用法上の共通点の分析・記述に着目し、以下の2点を示す。

(A) よい記述とは分析対象の2語にあてはまるがその他の語にはできるかぎりあてはまらない記述である。2語のみに共通の制約は多いほどよく、その結果として共通の意味・用法の範囲をできるかぎり狭めればよいことになる。

(B) よい記述のためには、分析対象の2語のほかに、さらに別の類義語（上例で言えば「つまむ」「かかえる」など）との相違点の分析を行なわなければな

らず、結果として、単に比較対象の2語を分析する以上に手間のかかる高度な作業である。

2. 類義語分析の基本的な手順

類義語の分析は基本的に以下のような手順を踏めばよいものと思われる¹⁾。

(1) 分析対象の両語の容認可能な用例²⁾の収集

(2) 両語の互換性の検討による用例の分類

- (ア) 両語ともに容認可能（交換可能）
 (イ) 両語ともに容認不可能
 (ウ) 語aのみ容認可能（交換不可）
 (エ) 語bのみ容認可能（交換不可）

これらのうち、(ア)(イ)が両語の共通点を示す用例であり、(ウ)(エ)が相違点を示す用例となる（図表1）。

図表1 類義語の用例の分類

	共通点		相違点	
	(ア)	(イ)	(ウ)	(エ)
文脈や共起成分 ⇒分析観点				
語a	○	×	○	×
語b	○	×	×	○

(3) 用例に基づく共通点の仮説の提示

例：例文①②…より仮説Pを立てる。

仮説P：「にぎる」と「つかむ」はともに……をあらわす。

仮説はできる限り少ないほうがよいが、一つの仮説で共通点をすべて説明することができないことが多い。一般には複数の仮説が立てられる。

(4) 用例に基づく相違点の仮説の提示

例：例文⑩⑪…より仮説Qを立てる。

仮説Q：「にぎる」は…であるが、「つかむ」は…である。

相違点の記述も共通点同様、仮説はできる限り少ないほうがよいが、複数の仮説を立てなければ説明できないのが普通である。

(5) 仮説の妥当性の検証

上記(3)(4)で立てた仮説の妥当性（その仮説が正しいかどうか）を検討する。すなわち、仮説が(1)で収集した用例にあてはまるかどうかを検討する。用例を新

たに加えて検討してもよい。検討の結果、仮説に誤りがあれば修正し、仮説が不足している場合はさらに新たな仮説を補足する。

(6) 仮説の妥当性の再検証

上記(5)で修正・補足した仮説について(5)と同様に検討する。必要に応じて仮説を再修正・再補足し、仮説によってすべての用例が説明できるようになるまで修正・補足と検証を繰り返す。

(7) まとめ

(3)~(6)の過程を経て、最後に残った仮説が一応の結論であるが、それらの仮説にさらに何らかの共通点・傾向があれば考えて記述する。これが、一応のまとめ・結論となる。

この(1)~(7)のステップにおいて最も重要な作業は(2)であろう。ここで仮説を立てるのに必要な用例が(ア)~(エ)のすべてにおいて十分であれば、よい分析・記述ができるものと考えられる。

3. 類義語の意味分析における共通点の分析・記述の必要性

前述のように、類義語の分析においては、意味上の相違点をどう説明できるかが課題の中心である。類義語の各語の意味をそれぞれ意義素₃の束であると考えた場合、一つ一つの意義素は他の類義語との関係において、共通の意義素と異なる意義素のどちらかに必ず分類されるはずである(図表2)。共通の意義素の集合{S₁、S₂…S_n}が両語の共通点であり、異なる意義素の集合{D_{a1}、D_{a2}…D_{an}}および{D_{b1}、D_{b2}…D_{bn}}が相違点である。したがって、相違点を明らかにすることは共通点を明らかにすることと裏表の関係にあり、だからこそ、相違点を説明する前にまず共通点が述べられることが多いのであろう。これは論理的思考において当然の順序であるように思われる。ここでは、理想的には共通点の意義素

が余すところなく記述されるべきである。

ところが、

これまでの類義語の分析を行なったものの中には、共通点の分析がなごりにされたものが少なくない。例えば、城生・佐久間 1996 は、一群の類義語の相違点を、各種意味成分の有無の表や樹形図で示したもので、相違点については包括的でわかりやすい説明がなされているが、共通点については、一群の類義語に共通

図表2 類義語の共通点と相違点が明確な場合

語 a		語 b	
相違点	共通点	相違点	共通点
意義素 D _{a1} 、D _{a2} …D _{an}	意義素 S ₁ 、S ₂ …S _n	意義素 D _{b1} 、D _{b2} …D _{bn}	意義素 S ₁ 、S ₂ …S _n

する意味を有する中心的な語の意味を見出し語の意味として記述しているだけで、それをどう導いたのかは説明されない。例えば、「つかむ」の項には「にぎる」「ひねる」「つねる」「むしる」「つまむ」「摘む」との関係が詳述されているが、共通点の記述は、すべての語に共通する意味として「つかむ」の意味記述を「手でしっかりと持つ」「手を使って何かをとらえる」[保持性]と提示する(p.39-41)だけで、それがどう導かれたのかは明らかにされない。

他の多くの類書においても、少なくとも、共通点の明確化に多くの記述を行なっているものは稀で、ほとんどが相違点の記述に重点が集中している。

しかし、このアプローチは、共通点が不明確だけでなく、相違点を明らかにするにも十分ではないと思われる。なぜなら、前述のように類義語のそれぞれの意義素はかならず他の類義語との関係において共通点と相違点に分類されるのであり、両方が明らかになって初めて両者の境界が明確になるからである。

実は相違点にせよ共通点にせよ、網羅せずに気づいたことだけを述べることはさほど難しくはない。2語の一方のみが使用可能な文脈や共起成分を挙げてその理由を説明すれば、相違点の一部を指摘することはできる。しかし、それでは相違点の

‘つまみ食い’になっている可能性をいつまでも排除できない。共通点との境界が明確でないからである(図表3)。

図表3 類義語の共通点と相違点が明確でない場合

語 a		語 b	
相違点	共通点	相違点	共通点
意義素 D _{a1} 、D _{a2} …	(意義素 S ₁ 、S ₂ …)	意義素 D _{b1} 、D _{b2} …	(意義素 S ₁ 、S ₂ …)

にもかかわらず共通点の分析・記述に多くを割かれることが少ないのは、相違点を明らかにすることに関心が向くからであり、それは類義語について考える場合、当然のことであろうが、一方で、共通点は多くの人にとって自明であるということが前提とされているようにも思われる。しかし、果たしてそうであろうか。

本稿の冒頭に述べたように、稿者は勤務校において担当している「語彙研究」という科目で類義語の意味の分析・記述を課しているが、学生の解答には共通点の記述が不十分な印象を与えるものが多い。

例えば、「にぎる」と「つかむ」の共通点は、という問いに対し、「どちらも動詞である」「どちらも動作を表す」という解答がある。これほどではないにせよ、「どちらも手でする動作を表す」「どちらも何かをもつことである」といった解答が見られる。これらは決して誤りではない。しかし、共通点の記述としては不十分である。「にぎる」「つかむ」の2語以外にも、「つまむ」「かかえる」など、この記述にあてはまる語がいくつも存在するからである。

「勉強する」と「学ぶ」の共通点の記述をみると、「知識や技術を身につけること」といった回答が多い。この解答はそれほど悪くはないのだが、「外国語

を…」という共起成分を考えた場合、この共通点の記述にあてはまりそうな語が「習う」「教わる」「覚える」など、まだいくつかある。共通点をうまく記述することは意外に難しいのである。

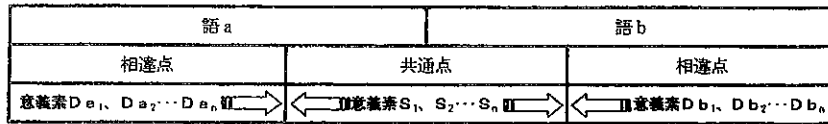
4. 類義語の意味上の共通点の望ましい記述

では、どのような共通点の記述が望ましいのであろうか。

上述の「にぎる」「つかむ」を例にすると、その共通点はできる限りその他の語にあてはまらない記述がよいということになる。[+保持][+手段=手]だけでは「もつ」「つまむ」「かかえる」なども該当してしまう。[+手段=掌]とすれば多少絞れるが、それでも掌の上へのせたり、両掌で挟んだりすることも考えられる。そこまで考えてはじめて「+指の内側への屈曲」⁶ という意味を加えればよいことに思い至る。

見方を変えれば、[+指の内側への屈曲] という意味は、「にぎる」「つかむ」の相違点ではないので、この意味が共通点に加わらないと、共通点と相違点の境界がわからなくなってしまふ。すなわち、2語のみに共通の文脈・共起成分の制約(図表4のS₁、S₂…S_n)は多いほどよく、その結果として共通の意味・用法の範囲をできるかぎり狭めた記述こそが、相違点との境界を明確にする記述なのである。このイメージを以下に図示する(図表4)。

図表4 類義語の共通点と相違点を明確にするアプローチ



この点は例えば「勉強する」と「学ぶ」の比較における、以下のような例文を考えても理解できる。

- a) 彼はお茶を〜でている。
(勉強する、学ぶ-×、習う-○、覚える、記憶する-×)
- b) 単語を一つ〜のも楽じゃない。
(勉強する、学ぶ-?、覚える、記憶する-○)
- c) 花子は専門学校で2年間〜た/だ 後(のち)に大学に進学した。
(勉強する、学ぶ-○、習う、教わる-×)

a)からは、「勉強する」「学ぶ」ともに、[+対象=知識]であるという仮説が立てられる。しかし、「産業技術を勉強する/学ぶ」「芸術を勉強する/学ぶ」などとも言えること、また、b)のように断片的な知識が対象にならないことから、

S₁. [+対象=体系的知識もしくは体系的知識を伴う技術]

のように制約の記述を精緻化することができる。さらにc)から、「勉強する」「学ぶ」ともに、

S₂. 「(教育機関)で」という名詞補語とともに用いた場合に「〜に在籍して勉強する」という意味の自動詞用法を持つ

ということがわかる。

このように共通点の制約を増やし、共通の意味・用法の範囲を狭めた記述にすることで、相違点との境界を明確にすることがより容易になるのである。

5. 類義語の意味上の共通点の分析の方法

ここまで述べてきたように、よい記述のためには、分析対象の2語のほかに、さらに別の類義語(上例で言えば「つまむ」「かかえる」や「習う」「教わる」「覚える」など)との相違点の分析を行なわなければならないと、結果として、単に比較対象の2語を分析する以上に手間のかかる高度な作業である。これを図示すると図表5のようになる。

図表5 類義語の意味上の共通点を明確にするための用例の分類

	共通点				相違点	
	(ア)	(ア')	(イ)	(イ')	ウ	エ
文脈や共起成分 ⇒分析観点						
語 a	○	○	×	×	○	×
語 b	○	○	×	×	×	○
語 c (d…)	○	×	×	○	○/×	○/×

図表5を図表1と比較してみれば、共通点の分析には相違点の分析が結局、必要とされること、しかも第三、第四の語(c、d…)を想定して分析しなければならないことがわかる。しかし、一般に三者の比較を同時に行なうことは大変であるので、まずは二者の比較を繰り返し行なうことで三者の比較ができればよいであろう。

また、共通点の分析が相違点の分析と比べてより複雑な作業であることが明確である以上、相違点の分析を先に行い、それから共通点の分析を行なうというこ

とも考える必要がある。あるいは共通点の分析と相違点の分析を往復し、その境界を見極める作業が必要になるにちがいない。

注

- 1) ここに提示したのは手順であり、分析の枠組みではない。すなわち、語義の認定や体系性の提示などと相反するものではなく、仮説検証の過程において語義の認定や基本義と派生義の関連等を示すことが一般的には必要とされるであろう。
なお、類義語分析に初めて触れたのは稿者の学部在籍時の岩淵匡先生の授業であった。ここに記した仮説検証の手順は、稿者の大学院在籍時に、語用論がご専門の深田淳先生に教えていただいたところに負うところが大きい。
- 2) 実例が望ましいが、ここでは容認可能な作例も含める。
- 3) ここでは國廣 1982 に従う。
- 4) 「つかむ」の意義が、比喻だけでなく基本義においても一群の類義語のすべてに共通するとはいえない点で、この分析にも問題がある。例えば「つかむ」は、基本的に対象を手に入れるまでの動作そのものに意味の重点があり、「入手が難しい」ものの「獲得」という意味（柴田ほか 1976、p.161）の派生も、その基本義から来ている。
- 5) 授業時に分析課題を渡し、1週間後の授業時に提出するという持ち帰り方式で実施している。辞典等を含め、何を参照してもよいし、友人等と相談することも可だが、記述だけは単独で行なうように指示している。
- 6) 「にぎる」「つかむ」の分析については柴田ほか 1976 も参照した。

引用文献 *出版年次順

- 柴田 武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田 進 1976『ことばの意味1 辞書に書いてないこと』平凡社
- 國廣哲彌 1982『意味論の方法』大修館書店
- 小学館辞典編集部編 1994『使い方のわかる類語例解辞典』小学館
- 広瀬正宣・庄司香久子 1994『日本語学習使い分け辞典』講談社
- 城生伯太郎・佐久間まゆみ 1996『右脳を刺激する日本語小事典』東京書籍
- 國廣哲弥 1997『理想の国語辞典』大修館書店
- 高橋圭介 2003「類義語「しる」と「わかる」の意味分析」『日本語教育』119号

(桜美林大学)